

# 2014 年度 センター試験 生物 I (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：5 題	解答数：32 問	
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	● 変化なし ○ やや易化 ○ 易化	
問題の分量（対昨年）	● 増加	○ 変化なし ○ 減少	
出題分野の変化	○ あり	● なし	
出題形式の変化	● あり	○ なし	
新傾向の問題	○ あり	● なし	

### 総評

問題の難易度に大きな変化は無いが、問題文の量には大きな変化があった。問題頁数が昨年度は 23 頁であったが、今年度は 29 頁に増加した。増加の原因としては、いくつかの実験の結果が示された上で、それについて考察させる問題が複数存在したことが挙げられる。しかし、実験結果が示していることはある程度学習した受験生であれば、予測がつく事柄である。日々の学習の中で様々なタイプの問題を解き、知識を蓄積していけば、このような問題も短時間で解けるようになるだろう。

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	A…細胞の構造・浸透圧調節 B…体細胞分裂	20 点	A は基本的な知識が問われた問題であった。ここはできるだけ早く解き終わっておきたい。 B の問 6 は受験生が見落とししやすい視点からの出題であった。
第 2 問	A…生殖 B…発生	20 点	A は平易な問題であった。 B は考察問題の形式で出題されているが、特定の細胞質に細胞の発生運命を決定する働きがあることを知っていれば解答までの時間を短縮できたであろう。
第 3 問	遺伝 A…複対立遺伝 B…連鎖と組換え	20 点	A は頻出とはいいい難いテーマであるが、複対立遺伝子であることが示されている上、優劣関係も示されているので、難易度はそれほど高くない。 B は伴性遺伝と連鎖組換えの融合問題は 2008 年以後の出題であり、なおかつ今回は三点交雑の問題でもあった。近年のセンター試験の中では難易度が高い問題であった。
第 4 問	A…受容器・神経・効果器 B…ホルモン	20 点	A は平易な問題であった。 B は図の形状から脳下垂体の前葉と後葉を見分ける必要があり、教科書の図について注意深く学習する必要があっただろう。
第 5 問	A…植物ホルモン B…光周性	20 点	A は良く見かけるタイプの問題であった。 B は資料の分析、および選択肢それぞれの正誤判定をどの実験結果から行えば良いかの判断に手間がかかる。